

1833  
18

繪平右衛門記二篇卷之六

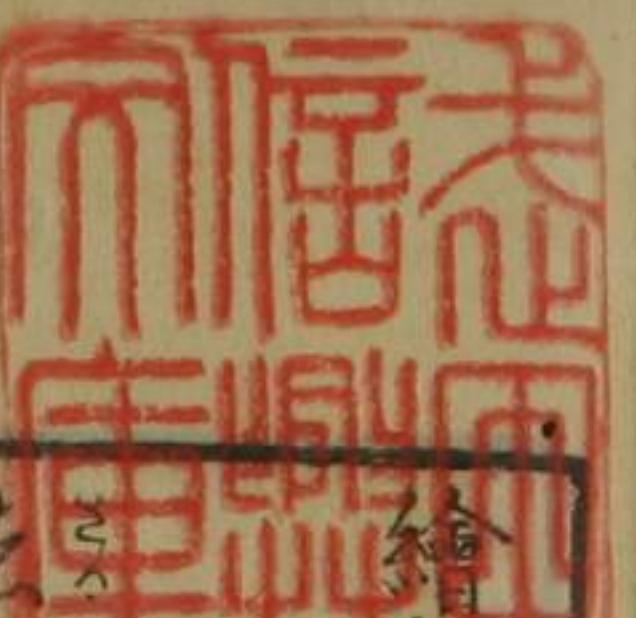
田彌

信長燒比叡山

義昭公與信長不和

信長上洛而圍室町城

三淵大和守討死



繪本太閤記二篇卷之六

信長燒比叡山

もがだに信長郷の彼阜の城よみて背く兵士の勞を体からひたあがえ  
龜二年八月十八日淺井長政を討ひとて又万余騎を率ひて志村  
の城小河の城金侍の城を襲ひ落陣ありて九月十三日  
俄々熱勢を立て比叡山を五圍え只一息よ素崩んとて方より攻光る  
ひそゝろ比叡山の衆徒涉其船倉よ月心一信長郷又欲討せ恨と  
鞍ひ落よ山門の衆徒等思ひりつけぬすうしんが大暴るき谷く嶺く  
の切不へ支へ防ぎ戦ふとも後よ三よ人の衆徒をしんべ信長が大軍  
を攻まられ防ぐ大破ひどろびりとて遁どまる小田勢勇み進んで  
全數を以て一閑木槍りて走登り山中のきくよ穴を放ててお節度



足利義昭公没落  
岩成主程亮討死

中河勢平討和田保家守



風烈しく吹かうて火を天を焦る。寒煙一山よりも建つて極まる  
山王二十一社をばらめとて大殿佛閣經苑鐘樓寺く院く又ゆ猶ア奉  
冬々き靈像地佛唯一行の烟より山門破滅のやうとまこと言語よ  
絶一次かし信長の大軍烟のやうに近登す途のる僧徒等と寔乃  
岩根彼の吉庵よ密教巡詔く討する程よ死人の山を攀じて  
大ぬ信長勇もいさんて坂本大をみよう麦登す坂やまもく強く寔ま  
山門旁の惡僧金剛坊とづる強らの精兵あり懲歎信長を討れんと  
谷底落て樹陰よまび一尺二寸の旗を上げて大矢の十又木をうちふく  
張の弓に矢づひ忘くとぞうきもあら切て放え矢以ちうくよ遠くを  
ばねひりて信長の馬の左股付通くすり信長又業の大ぬうれを  
馬よりひらうと龜をうけたる者を尾突けてたゞ士卒を下知へたまし

金剛坊は大矢の矢を射候ド心へらちて二の矢を射んとちうて後  
方より大矢をそ金剛坊背く射し終と矢をうけて切て放つを院  
さうど郷者てまへり金剛坊縛てこれをこれをこれに板谷の若狭坊を率  
信長をお候ドまは限とぞうさんとこしも本隊よ志のび居て神  
ひおじぞうすうり厚運よ奈ドたる信長郷にしも名は得金剛坊  
若狭坊が矢玉をれども悉く射ひりて左の股とおうとく御身の  
至る急に小田の後兵見をみて此方のそよにこそ曲者の龜りあれ  
ぞお殺せずとも往こそあれ三百余人を院の脇を擇まげてくる本の  
中へ靈のまぐわへと両人の惡僧天なる哉と歎息し右向に之を  
遁き去りぬされば山門三丈の衆徒兵討とスハ落糸キ塔拂ひに壓  
莖とゆう比叡の靈場一財より候もあらうこそ興へうるを汝才也



其二



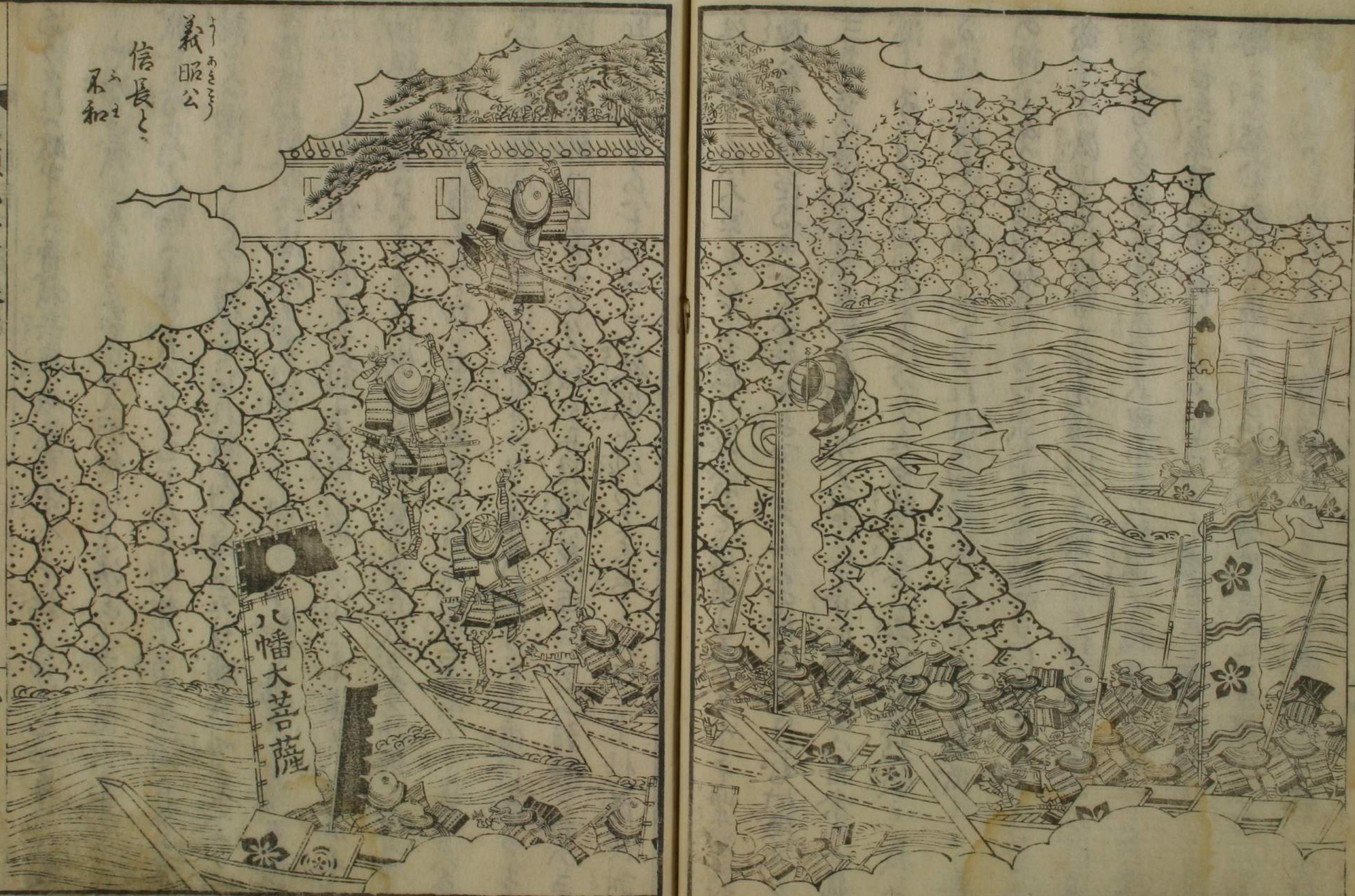
松山城天皇勅を傳教大師よに詔ひ玉坂護のねとて莫創  
西御山なる小衆後毛僧約を勧めれ我まし募り年々<sup>アシル</sup>され  
佛多<sup>アラハ</sup>も叶ひうらん信長がるよ山門忽滅に<sup>アラハ</sup>は歎く人へうら  
名前信長卿<sup>アラハ</sup>去年來の葬禮を教<sup>アラハ</sup>ド故<sup>アラハ</sup>を身懸き志<sup>アラハ</sup>郡を  
保<sup>アラハセ</sup>て明智十<sup>アラハ</sup>秀<sup>アラハ</sup>光秀<sup>アラハ</sup>秀<sup>アラハ</sup>之<sup>アラハ</sup>湯<sup>アラハ</sup>モ諸軍を<sup>アラハ</sup>にて出<sup>アラハ</sup>が外<sup>アラハ</sup>を保<sup>アラハ</sup>  
孔坊<sup>アラハ</sup>はらあ<sup>アラハ</sup>長政<sup>アラハ</sup>て出<sup>アラハ</sup>を<sup>アラハ</sup>後<sup>アラハ</sup>より<sup>アラハ</sup>の<sup>アラハ</sup>れ  
小田の軍勢<sup>アラハ</sup>退<sup>アラハ</sup>く<sup>アラハ</sup>より<sup>アラハ</sup>信長<sup>アラハ</sup>を<sup>アラハ</sup>謀<sup>アラハ</sup>みを討<sup>アラハ</sup>へ<sup>アラハ</sup>き付<sup>アラハ</sup>す  
ととて十月廿一日軍勢をまとひを圓<sup>アラハ</sup>こそ<sup>アラハ</sup>を終<sup>アラハ</sup>

義昭<sup>アラハ</sup>と<sup>アラハ</sup>信長不和

天正元年夏のに<sup>アラハ</sup>より宝印のね軍義昭<sup>アラハ</sup>と<sup>アラハ</sup>信長卿<sup>アラハ</sup>と<sup>アラハ</sup>御中不和<sup>アラハ</sup>す  
大名小名の軍の<sup>アラハ</sup>令<sup>アラハ</sup>かうと<sup>アラハ</sup>立<sup>アラハ</sup>て信長を討<sup>アラハ</sup>て天下の權<sup>アラハ</sup>を握<sup>アラハ</sup>る  
我もくと合戦の用<sup>アラハ</sup>をうけ就中甲斐の武田信玄<sup>アラハ</sup>の委取勇<sup>アラハ</sup>る<sup>アラハ</sup>  
されば信長の軍をはじく<sup>アラハ</sup>威<sup>アラハ</sup>を天<sup>アラハ</sup>にうかしむる心悪く思ひけ<sup>アラハ</sup>  
ど合戦<sup>アラハ</sup>と<sup>アラハ</sup>あちく等閑<sup>アラハ</sup>と<sup>アラハ</sup>捨<sup>アラハ</sup>てうがぬ軍の令<sup>アラハ</sup>を取<sup>アラハ</sup>て財<sup>アラハ</sup>を失<sup>アラハ</sup>  
信長を討<sup>アラハ</sup>さんと三方又<sup>アラハ</sup>余強多<sup>アラハ</sup>と出<sup>アラハ</sup>張<sup>アラハ</sup>る軍勢<sup>アラハ</sup>をませた  
まひ信玄<sup>アラハ</sup>がくれば<sup>アラハ</sup>かうよ<sup>アラハ</sup>信長を<sup>アラハ</sup>深<sup>アラハ</sup>せんうの羅<sup>アラハ</sup>き<sup>アラハ</sup>うらんと  
舊代の武士仁木大綱<sup>アラハ</sup>と<sup>アラハ</sup>井良和田尼<sup>アラハ</sup>と<sup>アラハ</sup>飯川松原<sup>アラハ</sup>の諸士を集<sup>アラハ</sup>つ  
石山と雲田の両石<sup>アラハ</sup>城を構<sup>アラハ</sup>兵士を蘿<sup>アラハ</sup>らせ日年三月既<sup>アラハ</sup>と<sup>アラハ</sup>敵對<sup>アラハ</sup>のを  
を取<sup>アラハ</sup>て<sup>アラハ</sup>対<sup>アラハ</sup>の<sup>アラハ</sup>対<sup>アラハ</sup>の<sup>アラハ</sup>信長に方<sup>アラハ</sup>面<sup>アラハ</sup>悉<sup>アラハ</sup>く<sup>アラハ</sup>敵圓<sup>アラハ</sup>め<sup>アラハ</sup>小國家の安危<sup>アラハ</sup>

此内うちと柴田佐之向木下明智池田勝川蒲生がまま合戦の用意  
亟くにそね大机み乃びこうおけ強勁の姿を現す小笠村家滅そ方  
期より久義昭云は得墮弱ほしく政道よ心を失ひ落つて至き  
慶酒兵婦も日夜狂歌樂よと歎う後へ恨む者ばかりとぞよみて  
信長わくと隨く政事を執りの權勢自存又信長よりてぬ軍へ  
みて安がざく義昭深くこれを恨む終の極こそうれ企を計謀す  
ぬ軍家の功臣三國大和細河刑部吉浦を屢々これを説めまととく  
た文は身ひ活躍よく我主にのゝ終すを心する武士の足利家時運寔  
よ庵きうと密に歎き悲しきをあはれを心する武士の足利家時運寔  
ゆ因所之賜より承と人をお漏と居してぬ軍より信長よりて毛  
頭隱心しれまき首折る紙をみてや安らまつてどもぬ軍一向送せ

活づば太軍をそむか駆つ軍威を諸國よもんとて柴田佐  
峰翁明智のにねよ万余騎をとへて先石との城を表しむけ城より  
三井寺の澤光院城奥野左衛門を大ねじて甲斐の武士八百余人籠  
城へありうが小田の大軍に方をゑ毛頭兵急に表討へ城を放く戰ふ  
ゆ候ど澤除て城を開きられば柴田勝家三万余人とて籠城へ京都  
の押へゆく由羽明智智峰翁の三ね七み金砖三千石と表すと  
城中より派辺官内侍勢九郎左衛門一と余人とて切て出く由羽う候へ且  
突入へ考むの勢つゝとて又所あまう引退く城兵のぐとほと退更  
峰翁兵庫既入候て戦ひしがれも口とく崩きとて殺さと城兵を除く  
勝よ奈備へを死へて追うるは明智光秀ひ十余艘の兵船へよ  
余人ゑとく湖みを後ア城の櫓よりちうぐと曹考城よ因とえけ



義昭公  
信長と  
不和

ありしへ城やより曾我兵庫又百余を拂ひし士卒とよろ  
して防き城より先秀う家のゆ明智孫ま活とて者此城の一番のつ  
我そとひり門く塙より付むる色と見く明智が勇兵一隊より活  
討とえ續けくとて後こそばれ我先と塙より付喚き叫んでゑ入  
るふ城ね曾我兵庫又兵倉に登りテびくやにて防きうち光秀  
船橋より出海炮をみてそと討よる練のほひしも遠うじ兵庫又  
胸板を打抜ひ生きまに例とて明智が勇兵孫年が得て難く  
席をゑぞて我先よと切ておしへ城兵の大わび討よさんくよめて大々  
の城戸を押用き都として近ううう光秀放てこれを追ひ城戸を  
固らめ舟轡をく居ううねねねとみ羽峰岩の面ぬハ思ふ種欲とゆびき  
却く時かひよたぞ返せよと隸波を従つて大延へに切ておしへ城兵討

野者殺をちくに這くとて迎來う城よへんととくに忽ち城中  
みはぎよ桔梗の紋の旗をとてと立ちて海炮を兩のあくとお出せ  
ハ体勢後邊大きて勢ひて後をううししへみ羽峰岩の面ぬ勝み家  
て追討と今へ遙どぐーとおりの被印をえくとて難兵又  
すまう京都にて逃うじへん若一くさきありとまちう

## 信長上洛而圍室町城

此年に月甲斐の武田信玄陣中より病死一卒ぬ死うしへ信  
長大みよろとび急ぎ上洛して京都の強劫を祛んとて1月せ  
日三カ又余病を1率し都をして進發する宴とね軍家の功臣  
細川刑部左衛門もへ添き恩意ありて佐久間信繁とあて信長  
又降を乞ふ又落木の城を荒木村重もね軍の柔弱を悪毛毛り門

く佐久間付て津奈の信長あんをして對面し御妙の津奈大  
曉がゆうびとて御盃をげひ細河處るよ向てお軍御門心乃  
攻勢を易め候て候え謹でやうるへ今度お軍家軍馬を勧し君と臣  
敵討のみ強らぬ軍猶りの思石れもあれば圓この大名小名小田  
家の摶家候そほも悪くお軍を進めまへせうか企よ及びへかうが  
う懇きみにいりや居る屢々あるとども其傍の臣下ありて  
敵て説言不見いらしど君軍威をふして諸國の敵後を深め  
みせじくへぬ軍一人へうでう胆心をばとぞ敵討の條あれどもや  
君もつうとぞ深くお軍を恨みせらりん只休すく天下の人の  
諭諭うき御計ひに義の御政ろこそわまやくふと風を流  
言えども信長卿細河が津奈の軍家の賜金を希んむる

ぐと深く感し恩石兵既く悲し終て附々荒木村重言上  
一ノ木の松乃十三郡が圍ゆく欲後ともく城を構へ兵士  
を集もあん某身切多以経付らん下さるべ身金を抛切集め  
ヤヒとやよる信長完尔として善くまことにわ節も拵て餉  
段をうぶるく巻くみうる腰刀引ぬき切またよ三つ又つに黄  
き荒木村重我志之食せずと目の上へ差付終て一度のひぐ  
み難いとふとあたの口ばくと用き切先よ歩くる飯段を  
一口み食んと信長へきに安ひ落ひ汝寧へ太まく至の如く  
切て落澤ちよしと落澤しが荒木面見本をとこ車に工房の御  
傳にてかうる相も信長卿ハ東山知恩院より陣を居らるる

信長  
上洛して  
室町の  
城を  
囲む



諸軍の白川栗田口底園清み六波羅毛羽竹田の邊より瀧雲  
霞のあくまくうなづけぬ軍が河味方の人々此軍威よせし勢  
き峰陽もや落木度をぞきてうなづけ其勢日信長の大軍活中に  
乱とへゆる放つく阿多火燒三乗室町の御城を十重二十重に  
圍と圍の夜天火を震動し只一息よ踏ほんじ形勢よ城中肝と敵  
魂を失ひ防人ともぞれの一人もゆく咽とてぞゑにいるね軍もや  
たけいわが一めせども外よ賜の勢もゆく和暉とべきは工後を名  
名をなる信長とて笑ひせらひる軍うち思ひとへうぞう廉義  
をねどぞきとてア妙成也と諸軍を遠く退くめ大隅守信慶と  
ひて和暉の御玉やまき向後も改道をひく御行路改め終ふ  
谷とと言はれて軍勢を引て本圍へゆり終ふ

## 三瀬大和守討記

愚の愚すとあまく愚ちうとうやね軍義昭とくとく參内の  
軍勢を催長し絶ひ今度は要害よあて歎と號とて七月と南宇治  
郡吉本源へ勅使ほしく三瀬大和ちく三乗の城を守らせらる大和  
守けりを深く諒めるとどもね軍文よ身ひ経つて今へ足利  
家の滅亡我討記の期と傳ひ其勢三百余人城門を固め歎のあら  
をねうけたる出来又く徳尾坂阜よばられ信長とて大軍と  
率し七月又日佐和山より船と湖あをお渡り又三乗へ押よせ  
らる三瀬大和守ひ今日を玄妙と譽ひ室らあしが日よける大軍  
を船の轍とも思ひ士卒と集め酒宴を設し滝ひ舞てぞみぐる  
ごまゆり城近く押寄周の夜を揚げうなづけ討て走らる

三國志和守討記



三百余人城戸を固めて切て出村雲立する大軍の中へ會釀り  
く室てへ當る矢幸に方ハ面よ切て兵士小田勢大軍をとつゞ  
三瀬が記載よりうごくた左をもと開き立大和ちへ里もひく心  
ちく右の使よ刻て入左の陣石成切崩一七八度とかくうけ  
を三百余人の兵又十人余よかうしんどじも退く心かく又歎中  
近へて信長遙みけ形勢を御邊ド城中の勇ぬ何者かうぞ  
見とすれと荒木挾津ちふ令じ給ふ村重が一こまう弛引てく  
しげ三瀬大和守も秀ぐ急ぎ立つてともくとやうる信長於  
細河刑部ち浦多も駿河と海う奇才三瀬大和守今日の勇識の討る  
せんと思ふちうじてて兵討取れどももみがゆくせずすやくたまが  
爰ある裏て馬よおゑ三瀬を固うけ廻せば大和守ミテと見て細川

義あが害よ来るへ我よ降まふとしる者うりん向善も受益もと無事  
後卒を引いて城中よこそ入りて此附兵士隊よ十六人を細川義も  
三瀬が嫁より入てを月とく引け本陣よ集うゑうくとやくいぞ先  
手の軍勢も城門を抑破り私見へてをあれびむる歎一人もゆく大  
お三瀬大和守を始めに後卒ト即よあると後うた切つて起つ  
うる衣いよといよじしき様之信長嫁よて脇く体役細河義  
もに令じて三瀬主後が記載を要く尋らせよ軍を勢(空)活  
郡へをよさせ致よ

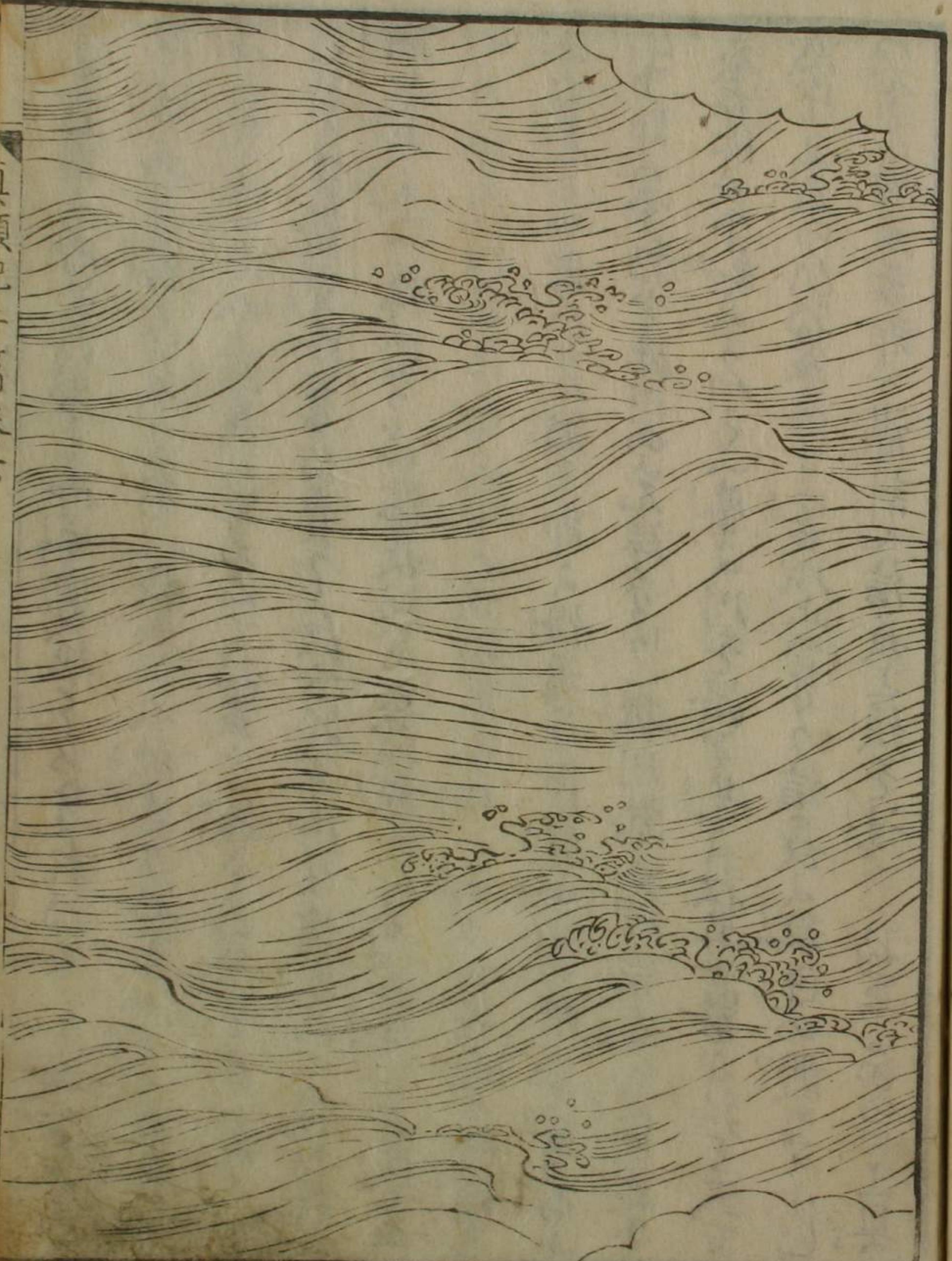
足利義昭公没落

江の天正元年七月八日信長の軍勢一万余騎山城國守治郎みの  
庄み幸陣を居るゝ旗旗天を覆ひ槍刀雲と凌ぎ軍威壯んじん

（まことに）軍義昭云仁本大鋸吉良上野飯川松井が安を始じ  
用望の武士多く集ひ其勢部全へと余請生本源の要害よ籠らせ  
強ひ寄り宇治の大橋に大橋を切落し川岸に思ひくの旗馬  
印川風よひぐれ行葉の落よ後砲の使者よ説計者先を並べて發ひ  
渡をを結居す信長の先陣縄榮伴豫入道一徹安日右近日左六郎  
陣を川端とく出せば信長の近士梶川孫三郎とく罰の者うつて先  
陣と心よけ縄榮が多に加わるが只一跨川中へ馬をもと近入宇治川の  
先陣梶川孫三郎宗重とくも度よゆうに良の方（三一文字よ後）  
先をゑて豫豫へ石橋へくと下糸をうせば誰も臂もれ豫もくぎ三日  
よどくと馬を近入き多ひく陵て後へうる里と曰附よヌテの底の方  
うちも肇固佐久間丹羽池田本下明智峰谷細川荒木蒲生等

が安秋もくとお渡とくとくともよき宇治の川激流と渡とそ  
又くみちる軍印味方の武士多くて川中より敵をお廻ると川  
岸に構へしも雲霞のまこと大軍よ膽をもじて戦ひて生本  
源の源へ進へうる小田の大軍一騎も換せぬ押海り勢中源を  
西へむろひ足程をうけ度へうるこれを見て生本源の源中ふ松井  
山城守康之と名を傳よ又百余入城戸を開ひて出縄榮勢  
と火をもじして戦ひて信長の大軍一舉よゑ入やと肇固統之と本  
下明智一派よ切てうる松井軍勢殺ま討と山城守も乱軍の中  
み討ひせら信長の大軍とて同もかく大も擱もよう擱立く  
構へとお破り園内にて度へうる大石がて縁卵を擱えりく  
足今此城築きよかること又くうる櫓中今も是までこそ武士

あーくらう  
足利義昭公  
没落



どもね軍の御前に出でて御生害をもたらされたる軍も遠方なく思ひに御自害と見えずありに難兵一人逃走す。ね軍御生害といふ件は次第に今信長大軍をみてね軍より遁るべしとぞ。又一前もおほむるに君がまじまほ左近などやね軍御生害を止す。築し塔を開き退去は終ひかくが信長何ぞ君が弑すべき。弑は工復どく。此有信長終へられまうじとく。よね軍を始めまく。並居る兵士軍卒も左どり思ひ。之を彼下郎又復者をば深小田の陣へぞ。さうす。以下郎の今朝宇治川の先陣をば。握川。三郎宗重。主事て本下。左郎が下知みよ。一番。川を渡て先づ松井が勢よ。おもてて敵中。水三のびる軍の生害。止まう。信長。弑逆の罪。よし。之。左郎が謀計。信長と復を遣。ね軍の。に上。良等よ。誓固。河内若に。三姓。左系。浦義。次。方。と。還す。年。せざる後。毛利照元が方よ。ゆき。多。別。娶。て。昌山。若士。と。陽。秀吉。天下統。圓。向。職。よ。経。ド。多。附。若。の。茶。湯。の。御。相。付。て。え。子。石。を。接。お。せられ。る。呼。喚。今。月。ハ。つ。る。日。ぞ。や。足。利。る。氏。御。脣。意。の。者。ね。軍。よ。任。せ。ら。と。あ。し。よう。ひ。森。凡。二百。余。年。五。下。の。兵。ね。と。作。立。ひ。い。も。十。世。の。今。よ。ま。す。て。其。家。忽。そ。ひ。其。ま。ひ。遠。燒。壁。也。よ。と。ま。よ。ひ。か。ひ。英。名。寔。よ。副。絶。せ。あ。ま。天。ち。る。武。令。か。れ。哉。

## 岩城主税亮討死

の軍勢本隊退去しとて少しがれが御一隊の武士を率く陣陣中湖  
志村まつる安達三姫の三人衆岩城主税亮祐道の軍勢の御方と唱  
信長を討んとて番役大助助後防毛弾もと二千余人とて渡の坂みち  
籠る本下辰吉郎秀吉細河刑部吉浦辰るめ人信長の命を蒙り討  
して渡の坂みちの本下辰吉郎下細河刑部越勢三千余人在ニ  
ら切石く埋伏せりとの勢をみて渡の坂みち押考攻こうる岩城元  
泰別勇五双の兵士が餘兵三千を引率戸を用ひて討ちてうる本下  
辰吉郎向合くまゝ戰ひ仍く而て退けば細河刑部吉浦入皆て槍  
を含き將く戰ひも負てまじれ本下辰吉遙間多く入船り後炮也  
放ちうけ周囲に拵て切てうるま射を附だうとも麦合一ヶ又崩えて放きを

細河辰も由よ樹舎と本下と船り遙に近づく合戦をひくればく  
西ね生れ入船く敵を擣きて思ふ國(おびきわ)と岩城主税亮軍よ  
うしてる勇ぬうじが本下細河が隊斗と構(おびきあひ)と志付遙を見合  
せ」よしも由ども日本五双の本下辰吉軍より功者の細河辰もおま  
よ遙ろく喰付て戦へ退くゆり叶ひて心うち(ひ)く六七町歟  
れ」よしと戰ひ初は附お家と恩(おき)後炮一發耳えんむちあれど  
二千の体勢一ふ余人在右より後炮を兩のぞく放ちうけ繰波を飛く  
切て出しが本下細河(さかわ)と返りしめてに三方が切崩せば岩城勇と  
震(おどろ)く戦(たたか)いとも十からず地(じ)め入船(いりふな)ばす車(くるま)とま討(うしま)されそんぐに船  
て渡の坂(わたるさか)とまつる安達(やすだ)細河刑部吉浦(よしのり)が良多(よしのり)ト津(つば)助(すけ)とま太功  
の兵(ひょう)おもと組(くみ)と組(くみ)とて是(ぜ)一人火薬(ひやく)のよた納(の)うがま税亮(ざいりょう)らうぞく



敵を窓とぞと討殺へ難く窓と引かて大橋へ渡りこれを  
結び下は燈内助をうけて岩戸又組付すと税亮が怒りと  
つまらしと金剛力を以ておら令すと燈内助岩戸勇力ふ  
ぐくも足立れば懺み達計を構へ組付すと橋よりとねらひ  
は燈内助の並ひるき水練の使者うれはに放してゆくあ度に見  
短刀を抜水裡よりて岩戸を利岩戸勇力の壯士とども水心と  
あくしげ教て乞ひ敵をうけ放つて燈内助も見燈内  
助水中央にて首筋を逢まく川の押切で陰より彼筋にちかく見  
作と呼ぶる岩戸を税亮を下は燈内助が討ちすとよづくと想  
勢一度よ渡の橋へまことにばたね討記へうなぎが今れ戦ふ事勢  
なく活訪番ひの人懺を用ひて津度の橋もあすう

## 中河勢平討和田守

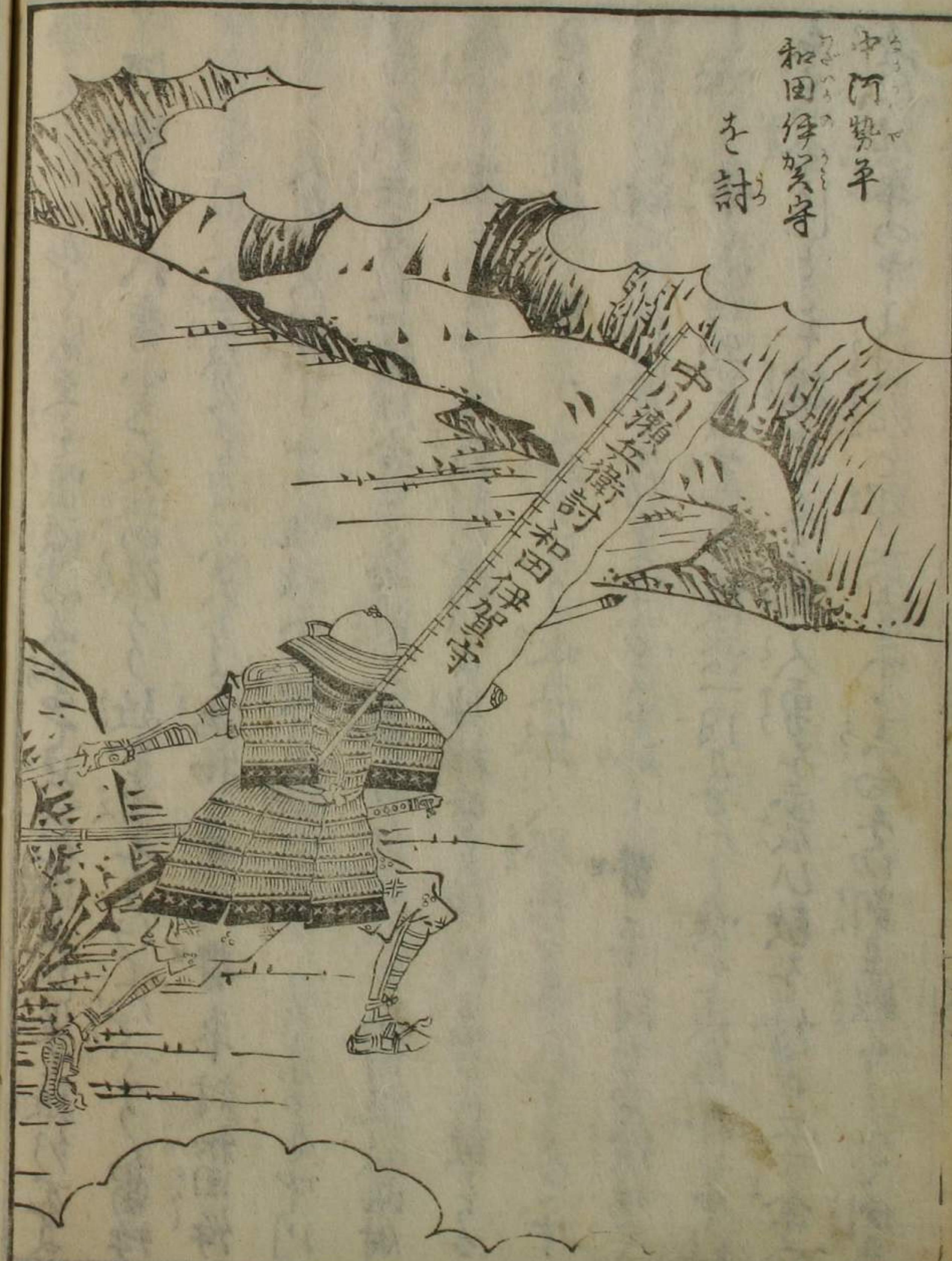
和田守兼守惟政の軍を一の功の者とくもすも勇劔の武夫と  
いは義昭より深くたのむて思石うち小笠本源龍源の子の病に對て立  
候りてある松の塔より籠舟を走る軍一翼よりを失ひほ後あひされ  
伊賀守は惜きのゆ因ひ病じて廢れがス六より要害の地よ此を  
構へ軍勢を集め合戦の用意と荒木橋津守村重の橋津一圓を  
切の約をは圓中の敵を切絆人と計りしがス六の要害みをとせ  
度く合戦及びれども荒木方舟を失ひ退て計議をまと和田惟政  
勇に請う荒木勢を討崩さんと遣兵八百余人を津ス六の要害と離  
ミ橋津とてお出でうけ附れ田がを害しし永井隼人との武功の  
武者惟政を連れてやうる敵の勢を味方と競ひに又信よねりす

小をみてあらはすとよししく要害の地にて久々戰ひに切々離  
りま構の合戦こそ敵をもての端をうと再三とぞめうじゆ候が守る  
まば荒木が弱兵何事すをはめにかた一萬よお崩さんと恐くと爲至  
みぬ荒木様は守村重は三又八百石の地をあはせと書いてあるれを互うう  
條が守を斬つた者と又百石の地をあはせと書いてあるれを互うう  
室に荒木が甥よ中河勢平義代秀討之と其高れに書添つてねも両陣圖は作り  
年はれて中河義代秀討之と其高れに書添つてねも両陣圖は作り  
令敵をほめまきてとや合戦をほめたり和田の良き那井ちまとと  
劉の者生えよ進と戰すみ放て敵をもる者多く荒木が兵左右をもとと  
」とてうる是を見て條が守惟政諸卒とて喚てうる自槍を  
追ひて群々敵や人をきなづけ行に方八面よ窓てとれ荒木

勢子とくらぶく數えと惟政勝みをと只一説跡を追て近江不  
中河勢平義代秀小豆山丘の後うと近出をうけて向うと和田  
家安もと同に急度ノくらうと大かう持物よ中河勢平討和田條  
が守と太文字に記して惟政大よ母ア猛虎の如く突進るを中川  
家安と別兵へかしらべ槍火合をす付計人更りせば戦ひが和田惟政母  
病全く痩くらむうと教訓の戒ひよ身作勞と中川家安よ敵をう  
の強度に勢平と討うと永井隼人那兵をまわをとて中  
川目げ討てうしら荒木村重味方よと勢平討とて倭けく  
とゆう捨くわけ出をば荒木の後兵一門よどんと嘗て永井那と申し  
えら金じとこそ擇てう隼人勇を震ひ敵を付り二十餘人  
終て乱軍のやと討ひと耶兵をまつて向を切削と眼くろんで倒



七三



真言語二卷

多後者主り安房より御近江を兵士また敵あげ我揚奉と警  
見せきたちくも近う法やあうえの不つま弓と三所計とけびうる  
次第よ敵もいとあめう縦よ慶くかうにすう荒木村重軍をみて  
も櫛よ押よを安ニ五三よまうすうされば櫛をちし後兵ともきぬ討  
ぬるこへうでうこんよ敵とぎ悪く降進き櫛彦城へすう軍教  
トて後今中川よ同うに足下されよ名代記へ正和田公討へ  
ひきの恩義あうてその言の誤うざらやと中川言て元徳の恩義あ  
はうべ和田を討どんが我討死もど彼と我との中一人死せば何ぞる  
れの姓名死みやうべきこと我もの心得と語うられば其勇壯  
を感じてあくまわに荒木松は守村重い和田伊望守を討勢  
漸近御よ寄れた池田の櫛をまきて池田櫛後守を退ひ伊丹よ迎く

多丹兵庫院を敵今ハ松津一國よ身向ふ者あようく石山の手願ふ  
と度く合戦よ及びぬどりもそうじき我りよ小田信長云ひ附益  
威勢豈よく遠近の諸侯あひ恐れ招うる小津條討するに爲  
めもこればけ勢ひよ深井家の根を歎びとて1年秋八月大内軍と  
多丹虎脚赤山よ城を築き浅井長政が小谷の城を一島よ端津ん  
と計々長政防戦叶キドと因ひたゞく然走急復をみて加勢の  
まをねうふ義系よ本領兼一助力の兵出さんと其用意匪也

This image shows a single, vertically oriented page of aged, yellowed paper. The paper is heavily textured and shows significant signs of wear, including a prominent, irregular yellow stain in the lower-left quadrant. Faint, illegible markings are visible across the entire surface, which are likely bleed-through from the other side of the sheet. The overall appearance is that of an old, possibly historical document.

